
ねたばれメモ帳

悠樹紫遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねたばれメモ帳

【Nコード】

N8898X

【作者名】

悠樹紫遠

【あらすじ】

「いいのかい？ネタバレなんて平気で食っちゃまうぜ？」

というかたはお好きなタイトルから選んでどうぞお進みください

(・ω・)

E↓ELYSION

D↓Deus Ex Machina

I↓Inferno Rose

R↓ELYSION reminiscence

となっております、Rはまだここに置いてないかもしれない。

2011年秋現在（なので補足）

RはE本編では脇役として登場している主人公の両親や五英雄に数えられる人物達、

つまりEの親世代編のお話です

基本的に悠樹がスランプになって長編が書けなくなると更新率がぐーんと上がります。

よろしく願います（´・ω・｀）

あらすじにお品書き。

悠樹の書いている小説のそれぞれからメモするものが欲しくて作成。

・ネタバレ？無理無理！というかたは回れ右をすると幸せになれます。

・ネタバレだと？よろしい！クリックだ！というかたはどうぞ先へお進みください。

悠樹は漫画も小説も最後までパラツと見てから読み出す野郎ですので
こういうものに抵抗が無いのですが、

「こういう文章の存在が憎い！」というかたには申し訳ありません
(・・ω・・)

ネットに書くことに慣れてしまっているので、

ワードだと中途半端に短い話は何も浮かばないのです。

そしてスランプになると長編が書けなくなり、

しかしワードは何も浮かばないという八方塞になるので作成しました。

大丈夫だ、問題ない

というかたはどうぞ先へ、最初にお品書きがあります(・・ω・・)

【R】チョコレートは苦いです【元祖幼馴染組】（前書き）

予期せず一個目がRでした。Dノベさんと同じ順番でコピーしてるので読者様に優しくない設計だなあ・・・。

【R】チョコレートは苦いです【元祖幼馴染組】

——リイリアは子供の頃に決められた俺の婚約者だ。

でも俺は親に決められたから、国のためだからとか

そんな理由以前にリイリアが好きだ、だから守ってきたし、この先も守り続ける

おとぎ話だったらこのまま上手く進んで結婚なんて・・・なるんだろうなあ

でも残念ながら俺が居るのは現実で、そうそう上手くいくわけねー・・・って

現在進行形で俺は絶賛実感中だ——

「はい、シエルドさん」

栗色の柔らかそうな長い髪に、新緑の瞳を持つ少女——

リヴァールヴェール第一王女リイリアは

小さな包みを少年に渡した。

透明なビニールに入ったそれは星型のチョコレート。

「おー・・・そっぴやもうバレンタインか」

受け取ったのは金色の髪に青い瞳の少年——

ヴァルゼド王国第一王子のシエルド・アーク。

リイリアからチョコレートを貰うのも、もう何回目か。

10回以上は貰っている。

しかし問題はいつも>義理チョコ<な虚しさ。

彼女は身分がある、当然調理場になんて立たないし立たせてもらえない。

いつもどおりだったら仕方ないか、で済ませるシエルドだが
今年はどうにもこうにも腑に落ちない点がある。

「なにそれ？」

「ひゃー！」

ひょいっと、驚いて声を上げる少女の後ろから覗き込む黒髪の少年・

（一見、少女と間違えそうだが間違えたら99%命は無い）

そう、全ては>コイツ>が原因だ。

シエルドの>もう一人の幼馴染<にして、現在>恋のライバル<でもある

レフィーリカ第二王子クロヴィス「アースランド、通称クロウ（長
いから略している、本人公認）

そりやもう馴れ馴れしくリイリアの肩に手を置いて

シエルドの手にあるチョコレートをじーっと眺めている。

「バレンタインだ、知らねーわけじゃねえだろ」

じとりとクロウを睨みつける。

残念なことにこの幼馴染は>契約者<と呼ばれる特殊な存在で
殺してやりたいところだが殺せない。

リイリアの肩に置かれた手だけでも切り落としたいがそれもできな
い。

いや、できないことは無いが落ちた腕を拾ってくつつけるなんて

リイリアにそんなスプラッタ映像は見せたくない。

目に毒だ、そもそもコイツの存在自体が毒なのだが。

「女の子が好きな人にチョコレートをあげる日だっけ？」

リイリアの顔を笑顔で覗き込んで問うクロウ

しかし目が笑っていない。

「か、感謝の気持ちですよー!!」

頬を真っ赤に染めて反論するリイリアの可愛いこと・・・
じゃない、そうじゃない。

いままさに言われたが、シェルドに対して送られるチョコレートは
あくまで、あ・く・ま・で

―感謝の気持ち―

なのだ。

目の前にリイリアが居なければ盛大に落胆したい。

そしてシェルドには笑顔でチョコレートを渡すのに、

リイリアはクロウの顔を見るなり真っ赤になってしまった。

さすがに分かるいくらなんでも分かる

ダテに幼馴染をやっているわけではない。

リイリアが>好きくなのはクロウだ。

「僕にはないの？」

しかも一方通行とかそんな罨はなく、クロウもリイリアが好きだ。

この二人が出会ったのは最近だというのに不公平すぎる。

神が居るなら呪いたい。

・・・残念、そういえば神は居た。

「え、ええと・・・！その・・・っ！！」

頬を真っ赤にしてわたわたとするリイリアは本当に可愛い。

本当に、その感情の向かう先が>俺くだったらいいのに・・・。

「催促して貰うもんじゃねえだろ」

もう涙目になりそうだが、それでも意地は張る。

勝敗なんて手に取るように分かるが意地は張る。

所詮シェルドは>幼馴染く

もう>異性くとして見られないのだ。
せいぜい兄か何かその辺のジャンルだ。
妹は一人でいいと本気で叫びたい。

「くれないの？」

リイリアの顔を覗き込むクロウは悪戯っぽく笑っている。

（ああ畜生、羨ましいな

俺だってそんな顔してえよ）

勝者だからそんな地雷的発言ができるのだ。

敗北が目に見えていたら義理チョコが来るかそもそも用意されてい
ないかしが想像できない。

それ以上見ていられなくて、シエルドは踵を返した。

なんでなんて聞かないでほしい。

好きな子が他の男に本命チョコをあげる瞬間なんてできれば見たく
ない、普通。

筋金入りのドMじゃない限り無理だ、そして俺はいたってノーマル
な主義だ。

もう本気で泣きそうだ。

アルトメイデンが厨房に立っていたという噂を聞いたのは、昨日の
お話。

【R】チョコレートは苦いです【元祖幼馴染組】（後書き）

季節外れも度を超すと罪だぞと誰かが言ってたけど気にしない！＼
（＾o＾）／

前回暗かったので今回は明るめに見ましたが・・・

・・・シエルドが可哀想なSSですね＾q＾

彼は損な役回りばかり回ってくるタイプです。

このSSの前にも最愛の妹が人外に盗られるという悲劇が起きたばかりなのにな！（

後のアーク兄弟の母親。

【R】dilettō【メル&クルセイド】（前書き）

更に二番手がR・・・どんだけ読者様に優しくない設計なんだ、
すいません（´；ω；`）

【R】dilettto【メル&クルセイド】

薄暗い部屋、眠りについた我が子の頭を撫でながら

ベッドに腰掛けた金髪の女の前に

半透明の>神<の姿があつた。

『メル、本当に私と契約してくれないのかい？』

銀色の長い髪に薄い緑色の瞳。

この皇国レイファリアを守護する>断罪神クルセイド<

真名は>ローレントリンド<。

「言つたでしよ、あたしじゃ役不足よ

それに自分より先に>子供の葬式<なんて、冗談じゃないわ」

金色の肩まである髪に、菫色の瞳を持つ女——>メルヴィング<は
苦笑した。

『では、君が>死ぬ<のか？』

「そのほうがまだマシね」

死ぬ、葬式、そんな単語が出ているのに

女は優しい笑みを湛えて己の子供の

自分より少し薄い金色の髪を撫でる。

『・・・私は納得できない、メルはこの国を救うに値する人間だ、
君ならきつと・・・』

つ、と

メルは左手の人差し指をローレントリンドの前に突き出した。

「あんたはもつと頭が良いでしょ、あたしじゃ>駄目<なの」

『しかし、メル・・・』

「あんたはあたしに>情<が移つただけよ、本当に>契約者<に相
応しいのは>この子<」

そう言つて、また幼い子供の頭を撫でる。

『私はこれでも神だ、情なんて・・・』

「あるわよ、>あんた達くにだって心はある・・・だから苦しんだんでしょう？」

>最愛の神くと、>世界<との間で・・・どっちが正しいかなんて分かっていても」

メルは董色の瞳を閉じて、小さく息を吐いた。

「・・・ソウルなら、きっとできるわ

あたしが死んでも、この子ならきっと乗り越えてくれる」

『・・・決意は固いようだ』

断罪神は苦笑して、メルの手の上に

>実体を持たない<己の手を重ねて、少年の頭を撫でる動作をする。

『・・・私は君が>好き<だったんだろうか？』

「残念、フェイルに逢う前だったら考えても良かったわ」

苦笑するメルにつられて、神も苦笑する。

逢ったときには、すでに別々の道を歩むものだった。

そもそも>存在<からして別々の存在だったが。

生きている次元が違う

見ている世界も違う

流れる時間も違う

だから>同じ時<は生きられない。

神はこの先、>戦い<に身を投じ

女は近い未来に>輪廻<に還る<。

そしてこの幼子は、>世界を統べる王<と戦うことになる。

それは変え様の無い未来の話。

『さようなら、メル』

「さようなら、ロー」

映像だけの肉体も限界を訴えはじめ

神は悲しげに微笑んでゆつくりと二人から離れた。

告死宣告をされたも同然だというのに

メルはいつもとなんら変らない、強気で明るい笑顔で手を振る。

それは＞少年＜の知らない二人の＞約束＜の話。

永遠の＞別れ＜の話。

【R】dilettō【メル&クルセイド】（後書き）

+++あとがき+++

dilettō↓デイレット＝伊語で「最愛の」の意。

メルとロー（クルセイド）の話はいつか書きたいなーと思っていたので

思いついた場面だけでもめめめ。

ソウルのおかーさんであるメルことメルヴィングは

自分が死ぬことも、その先でソウルが罪悪感に苛まれることも

ソウルとゼノンが衝突するだろうことも全て分かった上で自分が死ぬことを選んでいます。

メルは明るく快活な子ですが

だからこそ感覚的に色々なことを汲み取って

その結論として。

ローとメルはローの一方通行な恋だったらいいな、と思います。

恋と気付いたときには、メルはもう別の道に行くひとだった・・・とか。

ちなみに文章の最後が唐突だなあと感じたかたが多いかと思いますがgdgdになってきたので強制終了させました（

悠樹は平常運行でs）

【D墮天前】不運な貴女へ私をプレゼント！【レイス&メイズ】（前書

Dもまだあんまり更新してないというか一話しかないかもしれない。
この話はキャラを詳しく知らなくても読めるかもしれないが、読
者様に優しくないにもほどがありますね、すいません（ ; ω ; ）

【D 墮天前】不運な貴女へ私をプレゼント！【レイス& amp・メイズ】

木漏れ日が落ちる森の中を、一人の青年が枯れ葉を踏みしめながらよろよろと歩いていく

その後には、ぽたりぽたりと赤黒い血が大地に染み込んでいった。

金色の短めの髪に水色と紫の色の違う双眸を持つ神父服>カソック<の青年は

苛立ちも露な表情でよろりと大木に背を預け

そのままずるずると座り込む。

「あいつら・・・後で殺す」

低く呪いのような声で物騒なことを呟いて、青年は血が滴る右腕を見た。

発端はいつもの長女と次男の喧嘩だった。

そんなことにいちいち付き合っていたら苛立ちのあまり殺してしまいそうだったので

神父服の彼は見て見ぬフリを決め込んでいたのだが

いよいよ>喧嘩<が>殺し合い<になって、>主<と>次女<が止めに入った時だった

長女の放った毒付きトランプが青年の右腕を深く抉った。

故意に狙ったのではない、>流れ弾<というやつだ。

プツンと脳の中で何かがキレて、兄妹全員まとめて殺してやろうと思ったのだが

主が泣いて頼むので諦め、かといってあいつらの顔を見ているとやはり殺したくなるので>下界<に降りた。

帰ったら半殺しぐらいにはしてやろうと思っている、要は死ななければいい。

（少しだけ・・・）

毒を中和できるまで休もうと瞳を閉じる。

> 大天使< 同士の喧嘩だ、毒を受けたのが> 人間< だったら即死だろう。

最近は> 異端のモノ< が暴れることも無くなった。

平和ボケしていた、と後で彼は悔いる。

瞳を閉じて眠りについた青年を、見下ろす> 華奢な影< があつたことに

彼は気付かなかつた。

――天井

目が醒めてまず視界に入つたのはソレだつた。

慌てて飛び起きると見たことも無い、小さくて古い> 人間< の家。

(――まずい)

それが一番最初に浮かんだ言葉だつた。

人間との接触は基本的に> 禁忌< だ。

> 自分達< は人間とは違う、そして> 自分達が存在する< と知れば弱い人間は依存してしまう。

だから決して人間と馴れ合つてはいけない。

なのに、ここはどう見ても人間の家だ。

そこでふと気付いたが、白いシャツの下

右腕には丁寧に包帯が巻かれていた。

が

それが尚更> まずい< のだ。

もしかしたらその人間が手当てしている間にも傷は塞がっていたかもしれない。

> 人間< から見たら完全に> 人外< だ。

「起きたのか」

最悪その人間を>抹消<するしかない、そう考えていると
不意に木製のドアが軋んだ音を立てて開き、小柄な少女が部屋へ入
ってきた。

銀色の絹のような長い髪、紅い薔薇のように美しい瞳、雪のように
白い肌。

まだ10年と少し程度しか生きていなそうな少女だった。

青年は瞬迅した後、柔らかな微笑みを浮かべた。

「ええ、おかげさまで。」

貴女がここへ連れてきてくださったんですか？」

まさか、ありえない

そう内心では思いつながら問うと、少女は憮然とした表情で頷いた。

「放つて置こうかとも思ったが、>神父<を捨て置くのも寝覚めが
悪いと思つてな」

言いながら、ガタンと音を立てて狭い部屋の古びた椅子に腰掛ける。
その隣にあるテーブルには、物騒なことにナイフがずらりと並んで
いた

どれも切れ味の良さそうなものばかりだ。

その一本を手にとって、少女はソレを手中でくるくると回しながら
再び口を開いた。

「私はメイズ・アーク、おまえの名前は？」

>アーク<

どこかで聞いた姓だが、一体どこで聞いたのだったろうか。

まあ人間の姓など別に興味も無い。

「レイスです、姓はありません」

まさかこんな辺鄙な場所に住んでいる人間が、自分の真名を知って
いるとも思えない

だから本名を答えた、だがその瞬間

頬に鋭い痛みが走り、カツと背後の壁にナイフが突き刺さった。

「・・・」

青年はへらりとした演技くをやめて、冷めた表情で頬の血くを拭う。

そこにはもう傷など無い。

「アークはこのヴァルゼド王国の王家の姓だ、知らずにこの国に入ってきたのなら

おまえは人間ではないくのだろう、治療する傍から傷が回復していくなんて前代未聞だ」

少女の瞳には確かな殺意があつた。

だが青年はつまらなそうな表情で溜息を吐く。

「どこかで聞いたことがあると思いました」

今更思い出しても後の祭りだが

なぜ王女であるならこんな偏狭で、しかもこんな質素な家で、質素な生活をしているのか。

テーブルに置いてある僅かな食料と思しきパンにはカビが生えている。

不衛生にも程があるだろうと、内心呆れてしまう。

「王妃くの手の者か？」

その問いに違和感を感じて少女の紅い瞳を見る。

なぜ自らの母を王妃くなどと呼ぶのか

「さあ？私は人間のくだらない権力争いなどに興味はありません」

「・・・そう、か・・・」

軽く肩をすくめて見せると、少女は少しばかり落胆したような表情を浮かべた。

「>死にたいくんですか？」

少女から感じる負の感情く。

「おまえみたいな、何なのか分からないモノくに殺されるなら>納得して死ねるかと思っただけだ」

そう言つて椅子から立ち上がり――

窓を破つて飛んできたナイフを腰に挿していた剣で弾き
左手でテーブルのナイフを取つて窓の外へ投げつける。

断末魔が聞こえる前に、レイスは>死んだなく、なんてことを他人
事のように考えていた。

そして少女は音も無く――

――レイスには丸聞こえだつたが

入ってきた侵入者へガーターにかけていた銃を抜いて撃つ。

断末魔が響き、レイスとメイズ以外の人間の気配が全て消える。

彼女は、>人間にしては強い<

素直にそう思えるくらいの腕前だつた。

「傷が癒えたなら出て行け、薄気味悪い」

「――」

転がった死体を>肩に担ぎ上げて<

少女はドアを蹴りあけながら青年に黒の神父服を投げて寄越し

そのまま家を出て行つた。

（薄気味の悪さで言つたら女性が自分の倍体格のある男・・・の、

>死体<を担ぎ上げているほうが酷いと思いますが）

とりあえず彼女は自分のことを言いふらす気は無いようだと確認し
溜息を吐く。

「・・・物騒な家に住んでますねえ、>本当に<」

そう深々と呟きながら。

――>あいつ<は強い、と思つた。

木漏れ日が落ちる森の中を歩きながら、メイズは先ほどの男を思い
出す。

きつと自分など、死んだと理解する前に殺されてしまつたろう。

あんな化け物じみたものに殺されるなら、>納得して死ねるかと思っただ。

深く掘った穴の中に死体を投げ捨てて、少女は小さく溜息を吐いた。折り重なった幾つもの死体、中にはもう白骨化したものもある。

「王妃の手の者ではなかったか」

ぼそり

小さく小さく、落胆を滲ませた声音で呟く。

メイズは現ヴァルゼド王妃の子では>ない。

父が心から愛した貧乏な家の娘

されど美しい娘、つまり>妾の子供くだ。

だが確かにこの体にはアークの血が流れている。

だから大男でも軽々と持ち上げ、鉄筋コンクリートでも砕ける力がこの細腕にはある。

本当の母は死んだ。

嫉妬に狂った王妃の手の者にかかって

メイズの、目の前で。

初めて人間を殺したのは、その直後のこと
母を殺した暗殺者を、銃で打ち抜いていた。

まだ、7つの時の出来事だ。

母が死に、一度は途絶えた暗殺者も

自分が生きていることがバレてからまた増え始めた。

だが、母が守ってくれた命を性悪女のために散らすなど御免だった。

自分がやっていることが>正しいのか、そんなことは他人が後か

ら勝手に決めることで自分が決めることではない。

少女はただ>生きたかった

自分が殺さなければ相手は殺さずに居てくれるのか？

その答えは「NO」だ。

>殺さなければ殺されるく、だから殺してきた。

いつの間にか、人間を殺すことにも抵抗など無くなっていた。

家に着き、扉を開ける。

そこには案の定あの神父はもう居なかった。

家に入るのを、足が無意識に拒む。

「――」

まだ居るのではないかとでも思っていたのだろうか。

ぶんぶんと首を横に振り、家の中へ入る。

（厄介なものを拾ってしまったな、次回から気をつけよう）

先ほどまで青年を寝かせておいたベッドに腰掛けると

古びたスプリングが軋んだ音を立てた。

「あの男なら、私を殺してくれただろうか・・・」

しばし沈黙したあと、少女はぼつりと呟く。

>兄<以外の人間・・・ではなかったが、生物と話したのは久しい。
心に穴が空いたようだ――

ダンツと音を立てて、盛大にスプリングを殴りつける。

そんなことあるはずがない、あつてはならない。

誰かと話すのが>楽しいくだとか、>嬉しいくだとか、>安心<する
そんな>感情<は自分にはいらぬ。

だが、この先そうして生きていつて――

最期に、自分は一体どこへたどり着くのか――

独り、この箱庭でひっそりと息絶えていくのだろうか？

それとも暗殺者に負けて殺されるだろうか？

少なくとも>ハッピーエンド<は望めそうに無い。

また小さく溜息を吐いた時

控えめなノックの音が聞こえて、少女は僅かに瞳を見開いた。

間違いなく、ドアからだ。

呆然としている間に、もう一度コンコン、と小さくノックの音が響く。

銃と剣を確認して、少女はベッドから立ち上がって扉を開いた。そこに居たのは、ある意味予想外の・・・>黒髪の少女<。

幾重にも重なるヘッドドレスのレースで顔は見えないが青みがかった黒髪がさらりと足元まで流れている。

「こんにちは・・・先ほどこちらへ神父服の男が来ませんでしたか？」

「・・・来たが、今はもう居ない」

「そうですか、ではもしまた来ましたら・・・>妹が謝りに来たくと伝えてくださいませ・・・それでは」

妹・・・。

あんな人外にも家族が居るのだなと感心した頃には、少女の姿は灰になって消えていた。

さすが>人外<だ。

厄介なものを拾ったかもしれないな、と思いながら扉を閉めかけたとき

「ちょっとまったあああああああ！！」

「！？」

ぐいつと閉めかけた扉を引っ張られて、オレンジがかった金髪の青年の姿が視界に入る。

「おねーさん、さっきここにエセーっばいっていうか胡散臭い神父来なかったか？」

「来た、が・・・今はもう居ない」

先ほどの言葉を繰り返しながら、自分の力をいとも簡単に超えた青年の力に愕然とした。

人外だ。

やはり人外だ、間違いない。

厄介どころか>ヤバいモノ<を拾ってしまった。

「そっかー！冷やかしてごめんなー！じゃあ俺急いでるからー！」

明るい笑顔でぶんぶんと手を振って走り去る青年を見送りつつ

あいつは弟だろうかと考えながらドアを閉める。

その数秒後に悲鳴と共に木々が押し折れて倒れていく音が聞こえたが
あえて何も聞かなかったことにしてドアに鍵をかける。

こういつときの賢い選択は>関わらないこと<、だ。

再びベッドに腰掛けた直後、音も無く扉が開いた。

鍵をかけたのに――

「おまえ・・・」

そこに居たのは先ほどの神父服の青年、レイス。

手には買い物袋を提げている。

ここから街まではかなり距離があるはずだが・・・まあ人外ならアリだろう。

「貴女があまりに劣悪な食生活をしていらっしゃるようでしたので、お礼に」

そう言つて、キッチンへと向かったレイスは眉を顰めた。

「・・・貴女、まったく料理しないんですね」

「わ、悪いか」

食料の入手だけでも大変なのだ、料理をできるほど食料が・・・

「素直に料理が下手だと言ったらどうですか」

「私の思考回路でも読めるのか」

「読心の能力がありますので」

「薄気味悪い」

なんて厄介すぎるモノを拾ってしまったんだ、と今更後悔する。

「さっき、>親切なお客様くが20人ほどいらっしやいまして」
「――」

こんなところに来る客なんて、分かりきっている。

20人・・・。

「病人にも優しくないのでですね？病み上がりに20人も>接待くさせるなんて」

「全、員・・・殺したのか？」

さすがにメイズでも死んでいたかもしれない。

だがレイスはメイズの問いには答えずに、野菜を袋から取り出しながら話を進める。

「>親切なお客様くが話してくださったのですが>お義母さまくと仲がよろしくないそうで」

「どれだけえげつないんだ、おまえ」

暗殺者がそんな情報を吐くはずがないが

死なない程度に痛めつけて痛めつけて吐かせて殺したのだろう、えげつない。

「ね、私を雇ってみませんか？」

「は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

「お金は要りません、睡眠も必要ありません、でも食料も調達しますしお金にも苦労させません、

条件はここに置いてくださることだけ、お得ですよ？」

「いらない」

「よろしいですか、そうですね、そう言うてくださると思っていました」

「おまえ!!」

レイスとしては、単にあの兄妹という>家畜くどもの居る場所に帰りたくないだけだが

>この少女に興味があるくというのも理由の一つだった。

「家族が、居るんだろ」

「やめてくださいよ家族だなんてキモチワルイ、うっかり殺してしまつたらどうするんですか」

「さつき妹が謝りに来たぞ」

「ハハハ、そんなの世界が崩壊したってありえないですよ、そんな天変地異が起きたら殺してしまいます」

「二言目には殺すんだなおまえ」

ブラックジョークのようにも聞こえない
むしろ本気にしか聞こえない。

「ねえ、貴女に興味があるんです、いいでしょう？」

「駄目だ」

「じゃあ帰って兄妹皆殺しで」

「駄目だ！！」

最初はツンとした態度で言ったが、二回目は思わず叫んでしまった。
あまりにレイスの声が、本気くだったから。

「・・・」

少女はしばし悩んだあと、ジトリとレイスを睨みつけ
溜息を吐いた。

「分かった、気がすむまで居ればいい」

ここで帰したら尊い命が幾つか失われそうだと。
そう思っただけ少女は条件を呑んだ。

このときは

この出逢いが、生涯に及ぶものだとは思ってもみなかった。

——少女も、青年も。

——不運な貴女へ、神から天使をプレゼント。

【D墮天前】不運な貴女へ私をプレゼント！【レース& a m p・メイズ】（後書

++++あとかきーぬ++++

書くたびに二人の出会い話は劣化していつている気が激しくするのです。

メイズとレースは追想にも登場する予定なのですが
今のところレースはDで若干出ているもののメイズは全く出ていないので

メイズが登場してからまた読んでみてくださると
違った風に見えるかもしれません。

【墮天前】どうも、お義兄さん【レース×メイズ】（前書き）

続いてまたDです（・ω・）。一個前の続き（？）

【墮天前】どうも、お義兄さん「レイス×メイズ」

——正体不明の神父を家に迎えてから数ヶ月。

ある日目覚めたらボロ小屋が二階建ての豪邸になっていたり

今まで見たこともない家具や食器があつたり

色々私の想像の域を超えていることが連続で起きたため、私はこれが夢なんじゃないかと思い始めている

ちなみにコイツ、神父こと>レイス<が>何<なのか？

聞いた話によるとこの世界の>大天使<だそうだ、私は馬鹿にされているのか？

やはり一番安全な選択肢は夢おちというやつだと思うんだ、思わせ
てくれ——

「おはようございます、メイズ」

寝室から一階に降りると、レイスはすでに身支度を整え食事をテーブルに運んでいた。

「・・・前から思ってたんだが、金もおまへのその謎能力でなんとかしているのか？」

「いいえ？>貯金<からですよ」

「・・・貯金？」

天使のくせに人間の金を貯金しているらしい、なんて金汚い天使だ。

「もう気が遠くなるほど永く生きているもので、暇つぶしに人間として働いたこともあり・・・その貯金です」

「働きたくない人間が大半を占めるなか、暇つぶしに働く天使か」

「無限の時間を与えられれば、誰でも何をして暇になるものですよ」

椅子を引いて少女を座らせると

レイスも対面の椅子に腰掛ける。

「家はさすがにおまえのとんでも能力だろうな」

「そうですね、だって建て替えというかむしろ新築していたのではあなたが死んでしまします」

「人間はそんなに早く死なないぞ」

「私からすれば光の早さで死んでしましますよ」

いただきます、と二人で呟いてから食事を摂る。

最初レイスは何も食べず眺めているだけだったが、あまりに居心地が悪いので食べられないのかと聞いたところ

食べられないわけではないらしいので一緒に食べることにした。

コーンスープを口に運びながら、やはりこいつは料理が上手だと心の内で呟く

女に生まれながら目玉焼きも焼けない自分を振り返ると、少しは練習しておくのだったと後悔するのだが

「奥さんは家事が苦手でいいんですよ、そうでないと私のすることが無くなってしまいますから」

「心を読むなど言っているだろうが、あと誰の>奥さんくだ」

「夫なんて一人しか居ないじゃないですか、他に居たら殺してしまします」

どれくらい過ぎた頃からだろうか

レイスはメイズを「奥さん」と呼ぶようになった。

最初はそれはもうメイズは顔を真っ赤にして反論したものだ

レイスの中では決定事項なようで、いくら怒鳴っても「可愛いんですから」って言われ

いい加減反論する気も失せるというものだ。

——その数十分後

朝食のあと、メイズとレイスは押し問答をしていた。

「さ、さささささ触るな!!」

耳まで真っ赤にして叫ぶメイズに、レイスはきよんとする

右手に櫛を持つていることから分かるように、少女の髪を梳かしていたのだが

「・・・奥さん」

「・・・」

レイス側から見ると、首筋に少し手が触れただけで水をかけられた猫のように跳び上がった少女の反応。

「・・・男に免疫が無いにも程がありませんか」

「・・・うるさい」

青年に背を向けて膨れてしまった少女を一寸眺めていたレイスだが指先でちょんちょんとメイズの首筋をつつく

「ひゃッ!!!?」

「可愛いです、これハマリそうですね」

「おま・・・おまえなあ!!」

すぐにメイズの反応を楽しみ始めるあたり、こいつは間違いなく性格が悪い。

そしてメイズがレイスに掴みかかった瞬間、玄関の扉が盛大にバンツという音を立てて開いた。

「メイズ!?!」

飛び込んだきたのは金色の髪に青い瞳の少年。

「あ・・・」

「これは一体何が・・・って、そいつは誰だ!?!」

呆然としている少女を他所に、闖入者はレイスを指差して叫ぶ。

「兄上・・・」

メイズが呟いた言葉を拾い、レイスはじ・・・っと飛び込んだきた少年を訝しげに見つめる。

「・・・奥さん、似てないにも程がありませんか」

片や金髪碧眼の王子、片や銀髪赤目の隠し子。

色合いからして正反対だ。

「——おく・・・さん・・・?」

碧眼の少年は呆然とその言葉を反芻する
それを見て、メイズは慌てて声をあげた

「ちがッ!ー!違います兄上!ー!これは誤解で——!」

しかし少女の言葉は虚しくも届かず、少年から不穏なオーラが滲み
出て

有無を言わさず少年は腰に挿していた剣を抜いた。

「おまえは誰だ」

「ああ、これはどうもお義兄さん、自己紹介が遅れ——」

ギシリと、金属を受け止める布の音が響く

眦を吊り上げてレイスに斬りかかった少年の剣を、レイスは白い手
袋をした手で掴んでいた。

「あんまふざけてつと殺すぞ、まあおまえが誰でなんだろうと殺す
けどな」

「おや、お義兄さん落ち着いてください、あなたに怪我をさせるの
は本意ではありません」

「上等じゃねえか、メイズは俺のたつた一人の>妹くなんだ

どこの所属か知らねえが俺が>暗殺者くもしくは>神父もどきくな
んざに遅れを取ると思うなよ」

兄はレイスを暗殺の手の者だと思っているのだろう

兄は自分より強いが、レイスの能力は未知数であり・・・兄が無傷
で済むとは思えない

「兄上!話を聞いてください!」

「メイズ!」

兄が剣を引いて後退した瞬間に、間に割って入る。

「そいつを庇うのか!?どうして・・・脅されてるのか!」

「違うんです、こいつは——!」

「あなたより私が強いことを証明すれば、妹さんは頂いてもよろし
いんですか?」

しかしレイスは相変わらず底意地が悪かった。

「は・・・！？馬鹿！おまえ何を言い出——」

「だって、お義兄さんに認めてもらったら私達の間には壁は無いじゃないですか」

「ある！あるだろ！おまえが＞人間じゃない＜あたりに！！」

「そんなの些細な問題ですよ」

にこりと微笑んで、レイスは虚空から光の槍を取り出す。

「！！？」

それには兄妹共に驚いた

メイズも、彼が実戦で戦うのを見るのは初めてだが、だが・・・そんな虚空から出てくるような意味の分からない槍で斬るなり刺すなりされると思うと

尚更兄が無事で済むと思えない。

「ついにあのクソババア、＞人外＜に手出しやがったか」

さすがに兄もレイスが人間ではないと悟ったようだが、未だに暗殺者か何かだと思っているようだ

残念なことにメイズもレイスが人間ではないという事実を完璧に理解する羽目になった。

「上等、ぶっ殺してやる」

「そう簡単にいくと思わないでくださいね」

「！？」

レイスの姿が一瞬消えて、次の瞬間には兄の目の前に現れる少なくとも１メートルは距離があったはずだ

「油断は、禁物ですよ」

「——」

兄が殺されてしまうのかと思った、その次の瞬間——

血飛沫が舞った。

しかしそれは兄のものではなく

「こんな>人間ごときに気付かないくなんて、人間というのは本当に弱い」

後ろへ視線を向けた少年、その碧眼に映るのは>暗殺者<の死体。一人が失敗した瞬間、次から次へと黒装束の人間たちがどこからともなく湧いてくる。

その中の一人がメイズに向かって発砲しようとしたがその前にレイスの投げた光のナイフが心臓を貫く。

「私の奥さんに手を出さないでくださいませんか、その汚らしい魂で」

ばさり

白い羽が赤い瞳に映る。

レイスの背から伸びた純白の双翼

それを見た者達は、相手が人間ではないと悟ったのか逃げ出していく

「今日は機嫌が良いので逃がしてあげますよ、感謝してください

尤も、二度と会うことも無いでしょうけれど」

逃げ出した暗殺者の末路など、言うまでも無い。

「で」

兄、シエルド・アークはそれはもう不機嫌そうに対面のソファに並んで座っている片方、レイスを睨んだ。

「帰りたくないというからメイズが致・し・方・な・くここに置くことになったらこうなった、と」

「気に入りませんか？お義兄さま？」

「誰がてめえの兄だ？もういつペン言ってみろ、その口引き裂いて喋れなくしてやる」

それはもう険悪な空気に耐え切れず、メイズはレイスの隣で小さくなっていた。

どう説明すればいいものやら悩む、しかしこの男一切気にしていな

いどころかさつきからシエルドを挑発している。

「・・・まあ、今までメイズを守ったことは評価してやる」

「わあ、お義兄さまも許してくださいましたし早々に式を挙げましょう奥さん」

「ぶつつつつ殺すぞてめえ・・・」

テールを挟んでレイスの首元を締め上げる兄。

「メイズ、こんなやつさつさと追い出しちまえ、俺と城に帰ろう？
やつとおまえを迎え入れられるだけの地位に就けた」

「兄上・・・」

「あのクソババアならもう落ち目、俺が殺してやる」

「そんな・・・！！いけません兄上！！肉親を殺すなど！！」

「だが・・・！！」

首を絞められているのに平然と二人のやり取りを眺めているレイスは、メイズの言葉を待つことにした。

彼とて本当に彼女が拒むなら無理強いをする気は無かった
けれど心を読む彼の手前、メイズは本気でレイスを拒絶したことは一度も無い

だからレイスは居座り、メイズの傍に居る。

「っ・・・その・・・」

メイズは頬を真っ赤に染めて俯いた。

「こいつとの生活も・・・楽しい、ですし」

「——」

レイスの首を絞めていた手からいつきに力が抜け、シエルドの顔は逆に青ざめる。

「メイズ・・・おまえまさか、この人外に惚れたのか！？」

「惚れ・・・？！ちがつ！！」

否定しようとガタリと音を立てて立ち上がる少女の腕を引く

「！？」

体勢を崩したメイズはレイスの腕の中へ

「そういうわけですお義兄さま、少しばかり遅かったですね？」
「~~~~~ッ!!」

泣きながら飛び出して行った少年を微笑みながら見送って

レイスは背後からメイズを抱きしめる。

「私を選んでくださって嬉しいです、メイズ」

「べ、別にそういうわけでは・・・!!」

「ふふ・・・」

「ひっ!？」

メイズの肩口に顔を埋めると、やはり少女からおかしな声が出た。

少女が怒鳴ろうと口を開いたとき

レイスが先に口を開いた

「・・・嬉しいんです」

「？」

「私は不特定多数に求められて存在するモノで、死のうと消えようと>代わり<は創ればいくらでも居る」

「・・・」

力を抜いたメイズは、腰に回された腕に触れる。

「馬鹿、おまえの代わりなんてどこにも居ない・・・おまえはおま

えしか居ないんだ」

「・・・だからあなたが好きなんです」

微笑んだレイスは、ぎゅうとメイズを抱きしめた。

>レイス<を求めてくれる人間は今まで居なかった

最初はそうでも、彼の人外の力を見れば誰もがそちらに魅入られる故に、そのうち人間にも興味が無くなってしまった

もしももつと人間の傍で生きていたなら、或いはもつと早く出逢ったかもしれない

何千何万何億と生きてきて漸く出逢ったのは一人の>人間<

「愛してます」

真っ赤になる少女のぬくもりを、天使は腕の中に確かに感じていた

【墮天前】どうも、お義兄さん【レース×メイズ】（後書き）

++++あとかき++++

レース×メイズ（、、）

この二人のEPは書いててすごく楽しいです。

シエルドはやはり可哀想な役回り

この後「チヨコレートは苦いです」に続きます（無情！

【I】聖女は死の運命さえ振り払う【現世リリース過去】（前書き）

優しく無すぎるので順番をずらしてIを配置、初陣のあたりのメモです。

【I】聖女は死の運命さえ振り払う【現世リリス過去】

初陣のあたりを妄想してメモしておこうと思い。

このEPが使われるかどうかも、この通りになるかも分かりません
(作者が分かってない！)

時刻は黄昏時、けれどそこは黄昏などと美しい響きで表現できるような状態ではなかった。

赤い空を埋め尽くす漆黒の悪魔、大地を染める血の紅、まるで冥府のようなその世界で

幾百の悪魔に対して僅か十数名となった帝国騎士<ライヒスリッタ
ー>の一団は、すでに戦意さえ無く絶望をその双眸に映していた。

<ここで死ぬのか>、誰もが同じことを思っていたし、実際に最早
食い殺されるのも時間の問題。

それは仲間の死体を貪る黒い影に、その場の誰もが間近に迫った死
を覚悟していたとき

「……が、……る」

脇腹から大量の出血をし、大地に膝をついていた少女が一人立ち上
がった。

最初の言葉は小さすぎて風に掻き消されたが、

「……私が、食い止める」

少女は銃を両手に仲間達より前に歩み出て、視線だけを背後の仲間に向けて言う

「私が食い止めるから、あなた達は＜撤退＞して」

血で汚れた金色の長い髪、土と血に塗れた彼女はそう言ったが誰もが最初は何を言っているのか理解できなかった。

「な・・・に言っただよ、そんなの・・・無理だ」

ぼつりと呟いたのは灰色の髪に赤紫の瞳を持つ青年——グラウ。

「こんな数、一人で相手にできるわけねえさ！俺達はここで死ぬしかない、どうせ＜上＞だつて承知の上で——」

しかし彼女は、リリスは片方だけ紅く染まった瞳でグラウを睨みつけて言う

「諦めるのは死んでからになさいよ、＜捨て駒＞ならどうせここだけの縁なんだから、

逃げ切れれば幸運、逃げ切れなかった時はその時よ。ここで馬鹿な女が一人残るって言っているんだから、

あなた達はさっさと撤退しなさい、今日知り合った他人なんだから後腐れも何も無いでしょ」

それだけ言つと彼女は視線を悪魔の軍勢に戻し、銃を握る手に力を籠める。

「あ・・・あたしゃ逃げるよ！こんな数、相手にできるわけねえんだ！！」

一人逃げ出せば、連鎖するようにグラウを除く全てのエクソシストが撤退していく

「何してるの、早く行きなさいよ。まさか今日会った他人と心中したいわけじゃないでしょ」

凜とした背には迷いも恐怖も感じられない、

きっと彼女は本当に自分達が撤退するまでの時間を稼ぐだろうとグラウも薄々に感じていた。

「け、けど・・・それじゃああんたは・・・！」

「二人残っても意味なんて無いわ、むしろあなたはくお荷物よ」
もう一度だけ、彼女は紅い瞳を青年に向けた。

「行きなさい」

トンツと大地を蹴る少女の背、悪魔の軍勢の中に飛び込んでいく少女に叫ぶ

「待ってくれ、あんた、名前は——！！」

「——リリス」

それがこの戦場で、彼女が最後に返してくれた単語。
これ以上ここに留まっても、確かに自分はお荷物だ。死ねば彼女がここに残った意味もなくなる。

グラウは軋む足を引き摺りながら、最後に一人残った少女——リリスに後ろ髪を引かれながらも、撤退を決意した。

「まるで、地獄ね」

リリスを除く全てのエクソシストの気配が遠ざかっていく中、リリスだけは逆に悪魔の軍勢の中に単身飛び込んだ。

銃弾も残り少ないが、まだナイフがある。

彼らが撤退するまでの時間が稼げれば良いのだ。

——迎えに来るのが遅いわよ——

心の中でく夫に囁き、銃を撃ち、ナイフで切り裂く。けれど何百の相手に単身で敵うほどリリスも強くは無い
痛みも出血も限界を超えて、意識さえ朦朧とし始める

否。出血は最初から限界を超えていたし、痛みなどもう一体どこが痛いのかも分からない。

彼女のその時の記憶は、心臓に迫る黒い爪を最後に途絶えた。

糸が切れた人形のように倒れこむ少女の心臓に杭を打とうと迫った
その爪は――

「愚かな者達よ」

びしゃりと音を立てて、斬りおとされた黒い腕が大地に落ちて真つ
黒な水溜りを作る。

「貴様らごときがこのお方の命を奪えると思うな」

夕暮れに紅く煌く長刀、紫色の長い髪を一つに束ねたく少年――
アスタローシエ。

「女王に牙剥く者達よ、全て虚無に還るが良い」

空が黒く染まり、紅の雷が全ての悪魔を葬り去る。それは人間には
真似などできない、＜人外の力＞。

全ての悪魔が消え、赤い夕日に照らされた荒野で

アスタローシエは倒れて動かない主君の上半身だけを起こし、息を
していることを確認する。

＜まだ＞自分が傍に居ると知られてはいけない、まだ、あと少し・

・
＜彼女が魔女として罰せられない理由＞ができるまで。

「リリス様、＜王＞は必ず迎えにいらつしゃいます。ですから、今
しばし・・・お待ちください」

その場にリリスを寝かせ、アストは人間のエクソシストに化けて救
護班呼びに陣営に向かった。

――今しばし、王が目覚めれば彼女は＜本物の魔女＞になる

そうなれば天界は連れてゆくことができず、人間も彼女を迂闊に殺
せなくなる。

今、しばし・・・。

【I】聖女は死の運命さえ振り払う【現世リリース過去】（後書き）

++++あとかき++++

アストは地位的に特殊設定があるので、本編でもそのうち書きます。
書く・・・予定、だぜ？（´・エ・`）
その地位ゆえにクロセルとは特に仲が悪いのですが。

【R】「嫌いではない」「クロウ×リリア」(前書き)

2011年秋現在、RことELYSION reminiscenceは一話しかありません(*・ω・)(・・・)(、ω)(っ)・ω・)・；

こんなEPを書ければR本編で書けたらいいなあと思っている夢と希望だけでできた妄想文。

まだE本編と違ってクロウがデレてないです。

【R】「嫌いではない」「クロウ×リリア」

久々に平和な日常、長い旅路にも休息はつきもので、本日リリアはメルヴィングと共にレフィーリカの城下町のカフェに居た。

「ねえリリア、あんたは結局どっちが＜好き＞なの？」

「はひ？」

栗色の長い髪を帽子の中に隠した新緑の瞳の少女、リリアは先ほどからカフェをもぐもぐと頬張っている。

レフィーリカに来て初めて＜アイスクリーム＞というものを食べたリリアは、最近アイスがマイブームだ。

生クリームやチョコレートソースとの相性がまた最高で美味しい。

外は凍えるところではなく寒いけれど、カフェの中は温かいし

ここではアイスは食べられないので食べられるときに食べておく。

そんな花より団子な少女を、アップルパイを突付きながら眺めていた金色の肩まである髪に董色の瞳の少女、メルヴィングからの唐突の

問いに、リリアは首を傾げ、何かに納得したのか応えた返事は

「?・・・ケーキよりカフェが好きです」

「あんたねえ・・・言うと思った」

「いひゃ!?!いひゃいれすメルひゃん!」

メルは盛大に溜息を吐いて、普段ドジなくせに口の周りに食べ物をつけるというドジはせずに食べているリリアの頬を引っ張り、ぱつと手を離すとリリアは赤くなった頬を「いきなりどうしたんですか」と不満そうにさする。

「食い気の話じゃないわよ。＜恋人＞、つくんないの？」

「こいびと？」

まだ首を傾げているリリアに思わず眩暈がした、もう齡十五だというのに。

これがリヴァールヴェールの王女とは・・・天然要塞ではないか、

一体どんな男なら口説き落とせるのだ。

「あんたもう十五でしょ、婚約者の一人も居ないなんておかしいでしょうが」

「そ、それは・・・今は、その・・・非常事態ですし」

漸く理解したのか、新緑の瞳が泳ぐ。

ちなみに問うている側のメルヴィングにはすでに一人息子が居たりする、メル歳のリイリアと大差ない。

「いいのお？このままいったらべったべたにシエルドと結婚することになるんじゃないのお？」

以前のリイリアならその何が悪いのかと言っただろうが、今は違うと分かっている。

「そ、そんな・・・の、メルさんには関係ないじゃないですか！」

「まあ、リヴァールヴェールはいくらでも夫が居ていいわけだから？後付けでいくらでも増やせるんだろうけどお」

「な！！私はそんなことしないです！！」

実際歴史を辿ればそんな女王や王女も居るが、基本的にリヴァールヴェールの王女は気高い者が多い。

そしてリイリアももれなくそういうところゝがいい加減ではない。

「じゃ、好きな男の一人くらい居るんでしょうね？」

ニヤリと笑って問うと、リイリアは頬を真っ赤に染めて完全に顔を背けた。

「メルさんには関係ないです！」

「あゝら関係あるわよ、あんたの国次第でうちの国もどうなるか決まるわけだし？」

そうねえ、いつも黒い服着て髪まで黒くて万年葬式みたいな男と結婚したら困るわねえゝ

性格も陰気だし、ネガティブだしー、報復なんてされちゃ・・・
「クロウさんはそんな人じゃないです！！」

ぱんつとテーブルを叩いて顔を正面のメルに戻したリイリアの台詞に、メルはさらに笑みを深める。

「へええええええええええ、誰もあの真っ黒黒すけのことだなんて言ってないわよ？」

「・・・!!」

からかわれている。完全にからかわれている。

頬を真っ赤に染めたまま、リイリアは目の前のパフェをスプーンでつつく。

「メルさん・・・からかわないでください」

本気でしょげてしまった少女に、さすがにやりすぎたかと思いながらももしかしてもしないとリイリアは自覚しない。

「だって、このままじゃあ冗談じゃなくほんとにシエルドと結婚することになるわよ」

「・・・でも・・・<一方通行>です、し」

<可愛い親友>をここまで落ち込ませている<あの男>、本当に不器用な男だと思う。

「わかんないじゃないそんなの」

「わかり、ますよ・・・」

「あたしほど嫌がられてないわ」

「でも好かれてもいません」

普段は鈍感でドジなくせに、なぜここだけこうもマイナス思考なのか。

「<嫌いじゃない>ってだけで上出来でしょ、あいつ相手の場合」

「だって、<好きではない>と以前に言っていました。私は<目的を達成するために必要なだけ>だって」

必要なのはリイリア「エルスレッドではない、<アルトメイデン>。そんなことはありえない前提で言うが、もしもリイリアよりも優れたアルトメイデンが居ればそちらを使うということだ。

「・・・」

落ち込んでしまったリイリアを眺め、メルは小さく溜息を吐く。
あの男・・・否、あの＜義弟＞もいい加減素直になればいいものを。

——そんなやりとりを終えて、カフェを出たリイリアは一人で蒼氷樹くそうひょうじゅくの森の中にて落ち込んでいた。

メルは城に行くとのことで途中で別れ、氷の木々が奏でる音色の中で小さく溜息を吐く。

刹那、背後でサクリと雪を踏む音が聞こえて振り返った

「な!？」

しかしそこに居たのは＜仲間＞の誰でもなく——

なぜ＜此処＞に、闇が濃いこの国に＜天使＞は踏み入ることなどできないはずなのに、

無情にもそこに居たのは、ボロボロの翼に血色の瞳を持つ＜敵＞、意識すらなく＜人形＞だった。

周りには誰も居ない、助けも呼べない

(どうして・・・)

戦う力を持たないリイリアには、ただ願うことしかできない。無意識に、彼の名を呼んだ——

—— 同時刻

「さむっ!くっそさむい!!」

「うるさい」

隣でがたがた震えながら歩く幼馴染に、黒い髪に蒼い瞳の美少年は一言ぴしゃりと返す。

女子組がカフェに行ったと聞いて片方は進んで、片方は＜致し方な

く>迎えに来たのはいいものの、

二人が来たときすでに女子二人は店を出た後だった、とんだ迎え損だ。

「なー、クロウ」

「なに？」

冷めた態度のくせに律儀な性格なのはよく知っている。

あのく大戦>を境に彼は見た目も言動も態度も変わってしまったが、根本は同じだ。

「おまえ、どう思ってるの、リイリアのこと」

「・・・別に、くシエルドの婚約者>でしょ？」

「そんなこと聞いてんじゃねえ」

白い服に金色の髪、青い瞳の彼、シエルドは言動と態度以外、こと見た目だけはく完璧な王子さま>だ。

一方クロウはテンプレートな王子には見えないが、なんとも言えないく色気>がある。

「リイリアの気持ちは知ってるんじゃないの？いくらおまえでも」

「なんのこと？知らないね」

軽く肩をすくめてみせるクロウの襟首を、ガツとシエルドの手が掴む

「・・・あんまふざけてつといくらおまえでも半殺しにはするぞ」

「できるものならやってみたら？返り討ちにしてあげるからさ」

「てめ・・・!!」

いつもならここから大喧嘩になるのだが、ふとクロウの表情が変わり

「？、おい、クロ——」

そしてシエルドが名前を呼ぶ間も無く、クロウは風に掻き消えるように消えた。

「なんだ・・・？」

少なくとも、く何かがあったのは確実>だと思ってはいた。

——細剣の刃では天使の剣など到底受け止められない、
相手がこの国の空気に弱っているせいか動きが鈍く、なんとか避け
ているが何箇所か斬られた。

そして絶望的にもドンツと背中に氷の樹が当たる。

こんなところで死ぬわけにはいかないのに、油断していた。

「っ！！」

天使が剣を振り上げ、少女は新緑の瞳を固くつむる、訪れるだろう
痛みに震え、最期に呼んだ名は

（クロウ、さん・・・！）

わかっていて、彼が自分を守ってくれるのはアルトメイデンだから
だ。

それ以外の理由など無いけれど、いつでもリイリアを助けてくれる
人。

泣けば泣きながらも泣き止むまで傍に居てくれる人。

「僕のテリトリで好き勝手しないでよ」

肉を裂く音はしたのに、しかし痛みは訪れなかった。同時に聞こえ
たのは最後に名前を呼んだ——

「——え」

ドサリと倒れこんだ天使の体は、雪と同化するように灰になって消
える。

へたり込んだリイリアの脳が状況を理解する前に、視界いっぱい
＜黒＞が広がった。

「——馬鹿じゃないの？」

「・・・え、あ・・・クロ、ウ・・・さん？」

数十秒経つてようやく、＜抱きしめられている＞のだと気づいた瞬
間、恐怖を超えてリイリアの頬は真っ赤に染まる。

夢だろうか、いや、夢ではないと体の痛みが訴えている。

「・・・」

「――」
少しの間リイリアをぎゅうと抱きしめていたクロウは、やがてゆつくりと体を離れたが

その間リイリアは完全にフリーズしていた。

「死なれたら困るって何度も言ってるよね？＜絶対に安全な場所＞なんて無いんだよ、そんなこともわからないの？」

しかし体を離して、漸く見えたクロウの表情はいつもどおり冷めたもので、

かけられる言葉もいつもと変わらず辛らつで、気温自体も相俟ってどんどん気分が沈んでいく。

「す・・・みません」

「・・・」

俯いたリイリアの耳に、今度は溜息が聞こえる。

どうしてこう、自分は彼に嫌われるようなことしかできないのだろうか、迷惑をかけたわけではない

むしろ役に立ちたいだけなのに、いつも駄目だ。

「泣くのは、卑怯だ」

「え・・・」

知らず涙が零れていたのか、黒い手袋をした手が頬を撫でる感覚で顔を上げると

気まずそうに微妙に視線を逸らしたクロウの綺麗な顔が映った。

ふと、クロウの視界には斬られた肩の傷が映ったのか

「こんな、怪我までして」

「え・・・ふえ！？クロ・・・クロウさ！？」

ゆつくりと肩の傷に顔を近づけたかと思ったら、傷口に舌が這う感覚にリイリアが跳ね上がる。

硬直するリイリアの腕を掴んで、クロウは幾度か傷口を舐めたあと再び離れた。

「あんまり僕から離れないでよ、守りきれなくなる」

彼が自分を守ってくれるのは、＜アルトメイデンだから＞だ。

そうでなかったらきつと出逢うことすらなかった。

「・・・すみ、ません・・・でも、そんなに、優しくしないでください・・・」

ぼろぼろと涙が零れる、止めたいのに、迷惑なんてかけたくないのに、

そんなに優しくされたら勘違いしてしまう

「＜嫌いな相手＞に、優しく・・・くするなん、て・・・嫌でしょう・・・」

リイリアの言葉に、クロウは瞳を見開いた。彼女は見ていなかったろうが。

それでもすぐに平静を装って、クロウはリイリアの瞳に溜まる涙をまた拭う。

「・・・嫌いではない」

「え・・・」

「だから、＜嫌いではない＞って言ってるんだよ」

きょんとするリイリアから視線を逸らしてもう一度言っ

こんなこと面と向かって言えるものか、＜この気持ち＞は墓場まで彼女に知られることなく持つて行くつもりだ。

しかし、傷つけている自覚はあったが、ここまで傷つけているとは思って居なかった自分も鈍い。

そんな彼の精一杯の優しさに気づいたのか、リイリアはそれだけでも嬉しそうに笑って、

＜彼＞の＜好きな笑顔＞で笑って、けれど涙を零した。

【R】「嫌いではない」「クロウ×リイリア」（後書き）

+++あとがき+++

長いのでぶった切る！）

後半のお話を書きたかったのに長くなって長くなって^q^

この頃のクロウさんは初期リーマと同じで死ぬつもりで居るので、どうせ死ぬ男の好意なんて優しいリイリアには重荷にしかないと思ってツンツンしてます。

その分、未来でいちゃいちゃしていればいいと思います（*・ワ・）
まだ文章になってないのでなんとも言えませんが、
クロウとリイリアはきつと最後まで断固としてネガティブなクロウをリイリアが押し倒す形だと思います）

長々付き合ってくださりありがとうございました（´・`・）

【R】深遠の闇を呼び起こす【クロウ過去】（前書き）

Rは2011年秋現在1話しk（ry

相変わらず本編を更新できる余裕は無いけれども活字中毒なので、
R本編に使われるかもしれないEPをめもめも。絶対にこうなると
は限らないですよ！

【R】深遠の闇を呼び起こす【クロウ過去】

——この国は終わる。

<このままならば>確実に、この国はくだらない大義名分のもと歴史から消え去る。

ただ歴史から消えるだけならばまだ受け入れようと思えたのかもしれない、けれどそんなくお綺麗なお話>ではない。

何百という人々が殺される、<神の名のもとに>、<正義の名のもとに>——

何が神だ、何が正義だ

そんなこと、受け入れられるものか。

神がこの国を赦さぬと言うなら、正義がこの国を悪だと言うなら、

<真実>さえ塗り替えてやる。

何の罪も犯していない者が<悪魔>で、それを虐殺するのが<天使>だと言うなら<悪魔に生まれて>幸せだと思う。

そう、悪魔なのだ。ならばもうこれ以上<堕ちる>ことなど何も無い。

銀色の髪に紅い瞳の少年は王城の奥、ずっと隠されてきた漆黒の扉の前に立つ

<強く願う>頃には手遅れなのだ、ならば<眠る神>を叩き起こそうではないか。

対価は知っている、知っていて少年は・・・<クロヴィスII>アースランド>はこの扉の前に来た。

どの道、<想い>が届かなければこの扉は開かない。

取っ手も無ければ、隙間も無い、薄く発光する蒼い薔薇と茨の模様の真っ黒な扉、というよりは<壁>だ。

「・・・死神ナイトメア」

禁忌とされた神の眠る扉。強く願う者だけが開くことのできる扉。今、城にはほとんどの者が残っていないゆえ、ここまで来るのは容易だった。

決して触れてはならない、近づくことも許されないと、子供の頃からずっと聞かされていたこの禁忌の場所。

ここには五人の神の一人、＜死神ナイトメア＞が封じられている。

「・・・」

自分は＜王族＞だ、民を守るという当然の義務がある。王家に生まれてより民のために死ぬ覚悟ならばできている。

クロウは無表情のまま、そっと黒い扉に触れた。

神のお眼鏡に叶わなければこの時点で扉はなんの反応も見せないはずだ、だが・・・

クロウの指先は扉の内側に吸い込まれるように入り込んで、黒塗りの扉には波紋が広がった。

それに少しの安堵と、そして覚悟を新たにクロウは扉の内側へと歩みを進める。

「・・・私のもとに人間が訪れるのは、一体何百・・・いや、何千年ぶりだろうか。だが、まさかこうも幼い子供が来るとは思わなんだ」

扉の内側は真つ暗闇に扉と同じ蒼い茨の模様があり、その最奥に立てかけられた氷の棺の中に＜ソレ＞は居た。

氷の薔薇と氷の棺、その中に眠っていたソレは蒼い瞳を開いてゆっくりと起き上がる。

「・・・おまえがナイトメアか？」

『ああ、そうだよ。君はアースランドの王子のようだが、一体かような所まで何をしに？』

「＜契約＞を、したい」

少年の言葉にナイトメアは少しばかり悲しげな顔をして、小さく溜息を吐く。

『……この空気、そしてこの血の匂い……おまえは<ミストレスの息子>だね』

「そうだよ、だから……<条件>には見合うはずだ」

ナイトメアと、その双子の妹<ミストレス>の契約者は<神の血>を引いていなければならない。

クロウは正気であった頃のミストレスが人間——アースランドの王との間にもうけた子供。

『この扉を開けたということは見合うだけ強い願いがあるのだろうか、ね、

……事はそう、皇国の兵が攻め込んできたとかだろうか？そして私の力が必要になった、とか』

棺に背を預けたまま推測を述べるナイトメアにクロウは頷くが、ナイトメアはより一層困ったような表情になる。

『君は王家に生まれた者としての責任を果たそうとしているのだろうが、

安易に私の力など求めるものではない、どの道皇国の兵が君達<アースランドの人間を全員殺せば>、

この部屋の封印が解かれ、<君達を殺した全ての人間が亡者になる>のだから』

「死んでからじゃ遅いんだ、僕らが死ぬ頃には民は皆殺しにされている」

しかしナイトメアはまだ困ったような表情のまま、

『しかし、分かっているだろうがこの国以前に、<世界自体の寿命>がもう無いのだよ？

君がここで人柱に捧げられようと、そしてその力でこの国を守ろうと、数年経たずに世界は終わる。

ならば死ぬも生きるも同じことではないか？生き残るだけ辛いだけ

だ
』

「・・・それが<神>の考え方か」

銀髪の少年は俯く、それもあながち間違っていない、だがだからこそく好機>でもある。

「文献で読んだ。ナイトメアとミストレスは至高神が道を誤った時に<破壊>するために創られた」と、

今はまさに<その時>だろう？けれどナイトメア、おまえはこの世界の外に出られない、至高神の狂気にあてられてしまうから」

「・・・子供かと思ったが、意外にもよく勉強しているようだ」

ここでナイトメアの表情が少しばかり変わる、先の言葉を楽しみにしているような、悪戯っぽい笑みに。

「なら話は早い、僕を<宿主>に選べ」

やはり予想通りのことを言う少年に、今度こそナイトメアは破顔した。

「ほう、その血肉と運命の全てを私に捧げ、至高神や他の神々と戦う覚悟があるか？」

障害になる人間を皆殺しにして<罪の権化>になろう、と？」

「・・・覚悟の上だ。・・・——！」

瞬間、今まで少し離れた場所に居たはずのナイトメアが目の前に現れ、試すような視線でクロウを見下ろす。

「私と契約するということは<死ぬ>ことと同じだよ？」

君はまだ若い、この先にあるかもしれない<未来>の全てを失っても、それでも？」

「・・・この国が亡んだ先に僕の未来なんて無い」

「・・・よろしい、気に入ったよ。真名は？」

もう、躊躇うことなど何も無い、ここまで来てしまった時点で帰る道など無いのだ。

「クロヴィスIIアースランド」

『クロヴィス、汝を私の新たな主と定めよう、その運命は全て私のものだ
そして同時にクロヴィス、＜私の力＞は全て君のもの、好きなように使えばいい』

――これが、契約の始まりだった。

――・・・＜私＞がその一報を受けた時には、すでに手遅れだった。
＜クロウが部屋から居なくなった＞。それだけだ、たったそれだけのことだった。
けれど、予感というのは嫌なものばかり的中していく

「フェイル様！お下がりください、ここも最早長くはもちません！」
黒い髪に銀色の瞳を持つ青年、部下であるレーゲン＝シュヴァルツ
の声も遠くに聞こえた。

「・・・レーゲン・・・撤退の必要は無いかもしれない」

「・・・は？」

当然、フェイルの言葉にレーゲンは不思議そうに首を傾げる。
撤退しなければならぬのはもちろん問題だが、くしくなくてもいい
＞というのもまた、問題ではあった。

「クロウが・・・居なくなっただ」

「な・・・！どういうことですか！？まさかクロヴィス殿下は・・・
あの禁忌の地に・・・！？」

それだけで、レーゲンもフェイルの思考を察したのか青ざめる。
最近クロウが何かを熱心に調べているのは二人とも知っていた、その
内容は＜神＞に関すること。

だからクロウの部屋の前や、あの禁忌の地には見張りの兵を置いた
はずだが

この混沌とした乱戦の中、城の警護が手薄になっているかもしれないことは容易に想像できる。

そして、二人の予想は当たっていた――

突然、自軍の一隊を飛び越えて乱戦地帯に飛び込んだく漆黒の影>と、いつきに何十もの悲鳴が響き渡る。

フェイルとレーゲンからも、闖入者の後姿は見えていた。

漆黒の大鎌、足元から伸びる影の刃、黒い髪、黒い服、そして・・・その顔は、よく見知ったく実弟>の・・・。

「十字を掲げる兵に告ぐ」

影が刃となって次々に血飛沫の上がる中、黒を纏った少年は大鎌を手で宣告する

「我はレフィーリカ第二王子クロヴィスⅡアースランド！<神の力>をもつて汝らに裁きを下す！

我が同胞を喰らった狂信の子らよ！生きてこの地から逃れられると思うな！」

そんな宣告など、当然十字の兵は信じなかった、そう・・・<最初は>。

「恐れるな！悪魔の狂言に過ぎぬ！女神の導きは我らにこそあり！」

そして再び攻撃を再開する白い兵士達に、クロウは一寸瞳を閉じた後、<笑った>。

「我が同胞を喰らいこの地を荒らしたことを・・・後悔するがいい！！」

嫌でも、彼ら侵略者は<神の力>を目の当たりにすることになる。クロウの背後に浮かび上がる漆黒の長い髪に蒼い瞳の青年は両手を広げて空を仰ぐ

黒の少年の足元に蒼い魔方陣が浮かび上がり、周囲のざわめきもよそにクロウは大鎌を構える

「死んで後悔するがいい！狂信者共！」

空にも同じように巨大な魔方陣が展開され、漸く相手にもただならぬくその存在が伝わる。

「蒼薇神月くそうび しんげつ>！」

しかし気づいた頃には手遅れで、一瞬魔方陣が強い光を放ったかと思えば・・・

いや、思う前に侵略者の大半が粉も残さず蒼い光に飲み込まれて消えてしまった。

誰もが、何が起きたのかさえ理解できないまま・・・一方的な戦いはすぐに終わることになる。

剣で斬れば斬った先から腐り落ちて使い手までもが腐り死に銃で撃つても少し血が流れるだけで傷さえ残らない。

そして二千万の兵が誰一人逃れることさえ叶わず、雪原に散った。

静かだった。あつという間に終わったく神の裁き>。

「――・・・クロウ」

振り返った弟は、最後に会ったときは随分変わってしまった。

「夢・・・じゃ、ないんですか、クロヴィス殿下・・・」

レーゲンも同じように絶望にも似た表情で、今までずっと守り育ててきた少年の変わり果てた姿を見つめる。

「どうしたのみんな、勝ったんだよ？」

全ての事情を把握している二人の横を通り過ぎて、クロウは兵達の前に進み出る

「同胞達よ、脅威は去った！神の力は我らにある！もう侵略に怯えることはない！」

<クロヴィス殿下か？><本当に？><でも我らをお救いください
た><神の御使いに違いない>
そうして勝利を確信すれば、喜びが広がった。一部の、<神>のこ
とを知る者以外には。

――・・・

「殿下！なぜです、なぜかようなことを・・・！」
城に戻つてすぐ、クロウは上層部の部下と兄達に質問攻めを受ける
ことになった。

円卓の間に集つた数名の騎士と兄と、クロウ。

まず最初に苦しげに言葉を紡いだのはクロウの教育係りであつた女
騎士、ネーロ。

「なぜって、だつてあのままでは負けていたろう？」

「・・・殿下、私達は同胞を・・・いえ、<主>を犠牲に生き残つ
て喜ぶほど愚かではありません」

レーゲンも同じく、苦しそくに言葉を紡ぐ。彼がこんなことを言う
なんて珍しいものだ。

「我らの力が及ばなかったのだということは分かっております！で
すが・・・！！ですが・・・こんな・・・」

彼らは知っている、封じられた神、「死神ナイトメアの<対価>を。
「・・・クロウ、それがおまえの意思なのか？確かにおまえの力が
無ければ私達は死んでいた、だが・・・」

「兄さん、貴方は国を継いでくれればいい、そして守っていればい
い、僕が居る間はもう脅威は無い」

カタリと席を立ちクロウは身を翻す

「・・・じゃあ、僕はナイトメアとの契約があるから、<神>を止め
に行く>けど

この先何十年かは平穏に暮らせると思うから、後のことはよろしく

ね」

彼を止められる者は居なかった。

契約を反故にすれば契約者は死ぬ、止めることなどできるはずもない。

（――さて、まずはくアルトメイデン>を連れ出すところからかな）

そうして、彼の神を巡る物語が始まった。

【R】深遠の闇を呼び起こす【クロウ過去】（後書き）

+++あとがき+++

クロウ過去編をどんな感じにしようかなーと、考えている案の一つを文章化しました（・ω・）

戦いの最中でナイトメアが具現化してもいいなあーと思ったんですが、

それだとクロウは詳しい契約内容知らないまま契約することになるので

契約内容を知っている上でのクロウのパターンならこうかなあと。

実際どうなるかは分かりません（作者がry

【R】亡ぶ世界に標された道【メル過去編】（前書き）

猛烈に頭の中に浮かんだEPをそのまま殴り書いたので色々あれです（´・ω・｀）

このEPが使われるか否かはやっぱり不明

何個か載せていませんが、これでだいたいDノベさんと同じくらい載ってます。

【R】亡ぶ世界に標された道【メル過去編】

——それは、少し時を遡った時のこと。

その時はまだ世界は<平和>で、<あたし>はただ繰り返される日常に飽き飽きしながらも

当たり前が続くはずだった<日常>の中に居た、その日も<あたし>の日常はいつもどおりに進むはずだった——

面倒を見られるのが嫌で傍仕えのメイドはみんな追い払った。

誰も何も言わなかった、女に生まれた自分はエルスレッド家に<売り込めない>し、

<十四番目>なんて、数えるのも面倒な数の姫の中の一人、いつかこの国の適当な貴族に嫁ぐだけの<モノ>。

あと何人増えるんだか分からない<有象無象>の兄妹の中の一人。それでも<ここ>に居るのなら、いつかこの家のために何かしらの道具にされる、分かっている。でも……

——……あたしは嫌よ——

誰かに決められた道なんて歩みたくない、しかし<この大きすぎる家>に居るだけで自分は養われているようなものだ。

それも嫌だった。

<自分で決めた道を歩みたい>と思っていた、優雅な暮らしでなくてもいい。

こんなところでお高くとまって<お姫様【プリンセス】の演技>をして、夜会にお茶会に……

いや、考えるのも面倒だ。とにかく、この暮らしが自分に合わないことはよく分かっているつもりだ。

(暇、暇、ひま、ヒマ、ひーまー)

彼女の日常は退屈まみれだった、退屈そして退屈。

遠く聞いた噂で兄や親はまたく闇の国>とやらに攻め込むつもりで居るようだ。

次の戦いは大きなものとなると聞いているが、この国が負ける要素は一つも無いとも聞いていた。

（悪魔ねえ・・・悪魔、なんとなく<スリル>を感じる単語ね。ま、あたしにやあ関係ないんだけど）

おかしな話だ、<その国>は何度も<この国>からの侵略を受けているくせに、こちらに攻め込んで来ない。

（ふつつー殴られたら殴り返すもんじゃないのお？右だか左だかの頬を打たれたら逆をなんとやらってやつう？

・・・ま、戦争なんて<高尚なお話>は女のあたしが考えてどうこうなるもんじゃないか）

金色の長い髪を靡かせて、董色の瞳に白いドレスの<彼女>はどこへともなく歩を進める。

ふと、視界に<図書室>の扉が映った。

（本か、本ねえ・・・暇つぶしには丁度良いかも、寝る気がするけど）

普段の彼女ならば絶対にスルーしていく部屋だが、この日はどうにもその部屋に興味が湧いた。

思えば、これが<始まり>だったのかもしれない。

城の中にあるその図書室は、普段誰も使わない。

優雅な生活を送る自分達皇族には、わざわざこんな部屋に訪れずとも家庭教師がついている。

「・・・げ。読めない」

しかし本棚の文字を辿っても、なかなか読めそうな本にいきつかない。

もう帰ろうかと早くも諦めかけたとき、本棚の奥に一つ、不思議な

本を見つけた。

「・・・なんだろあれ」

白い表紙に金色の文字で刻まれたタイトルは――〈楽園の崩壊〉
物騒な響きだが、今の彼女にはとても面白そうで、〈この生活〉を
塗り替えてくれるのではないかと思えるタイトルだった。

（聖なる国にこんな本があつていいの？）

そう思いながらも、興味が勝って少女はその本を本棚から引きずり
出してページをめくる

どうやら自分にも読める程度のもののようにだ、しかし少女の表情は
すぐに強張った。

ぱらぱらとページをめくっていただけが、気になる文字があつた
のだ。

『エル崩壊』、『聖女アルトメイデン』、『死神ナイトメアの覚
醒』、『五英雄』・・・そして

――『＜皇国の十四姫＞、闇の者と恋に落ち、未来に繋がる闇
の子を二人産み落とす』

（・・・ちよつと、なによこれ？）

自分のことではないと思いたかったが、その前に記された＜年代が
自分の生まれた年と一致する＞。

（冗談でしょ？）

詳しい記述を読んでいくと、少なくとも今から数年のうちに＜ここ
に標されたことが現実になる＞。

馬鹿な、こんな本でたらめだ。自分の存在は、＜運命＞は、全てが
決まっているというのか。

この記述が本当ならば、＜自分が愛する相手＞も決まっているとい
うことになる。

「――最ツツ悪！！やっぱこんなとこ来るんじゃないかった！！」
バンツと本を勢いよく閉じて、適当なテーブルの上に放り出して少

女は部屋を出て行く。

神だとか運命だとか、そんなもの信じない。

自分は自分で決めた道を生きたいと何度も言っている、この国にも神が居るなら耳が遠くていらっしやる。

少女が出て行った後、その本にそつと触れる人影があつたことを当然彼女は知らない。

実体を持たず半透明の<ソレ>は、哀しそつに笑つてく消えた>。

とまあ、そんなことは嫌なことをすぐに忘れるのが特技の彼女は翌日にはだいたい忘れていた。

ただ気になるのは・・・

（あたしの運命の相手は<カミサマ>が決めてるって？わりとマジで馬鹿みたい）

彼女の女としての夢というのは、<一般>から外れている。

相手は庶民が良い、稼ぎは少ないほうが良い、自分も一緒に働きた
いから。

（<闇の者>って何よ、まさか人外じゃないでしょうね、冗談じゃないわよ）

本日もヒールの音を高らかに鳴らして不機嫌も露に回廊をあてもなく歩いていた少女はふと立ち止まる。

——闇の者・・・

どこかで聞いたフレーズだ。

（——<闇の国>？）

気づけばそんな気もしてくる

（ちよつと、マジで冗談じゃないわよ！？あたしは売国奴になりた
いわけじゃないんだから！！

・・・ていうか、なにあんな本のことマジだと思つてんのあたしも
・・・落ち着け落ち着け、深呼吸つと・・・）

頭の中から昨日見つけたおかしな本の情報を根こそぎ追い払い、<

今>のことを考える。

嫌なことを忘れるには<楽しいこと>だ。

（あ。そーだ、たまには夜に外を出歩いてみるとか）

悪戯を思いついた少女はすぐに本のことを全て忘れ、今夜の予定を脳内で立て始める。

この城から抜け出すのは<彼女>には<立場上どうでもいい>ので、至極簡単なことだ。

そして、この日の夜に全てが動き出した。

――夜、彼女は本当に城から抜け出して賑やかな街に繰り出した。

城では決して見かけないような屋台の安い食べ物を買ったり、様々なデザインのアクセサリーを見たり。

（やっぱ街は<生きてる！>って感じがするわー）

適当に歩いて機嫌もだいぶ回復した彼女の瞳に、ふと白い外套を纏った人物が留まった。

人目を避けるように歩いているのはなぜだろうか、身長のために目立つが周りの人々は気にしていないようだ。

（なんであんなのかぶって歩いてるのかしら？）

白いフードを口許までかぶっている姿は不思議で、店先で花を並べていた女性に尋ねてみる

「ちよつといい？」

「はい？」

振り返った二十代くらいの女性に、フードの人物を指差して問う

「ねえ、ああいう人は珍しくないの？」

「あらお嬢さん、関わらないほうがいいわ。ああいうのはだいたい<傭兵か暗殺者が口クなものじゃない>から」

「ふうん……。ありがとう」

その忠告を受けたあとも、彼女の瞳はその人物を追っていた、我ながら不思議だが恐らく<好奇心>から。

一瞬その人物がこちらを見たような気もしたが、この人ごみだ、気のせいだろうと思ったが

不意にその人物は裏路地への道へ踵を返してしまい

（あ、待った・・・！！）

この時、なぜこんな行動に出たのかも我ながら不思議だったが、日常に<スリル>を感じたせいだろう。

第六感で、あの人物は何か重要なものだった。だから、彼女も暗がりには足を踏み入れた――

しかし

「あれ？」

居ない。確かにこの路地に入ったはずのその人物は居なくなっていた。

あたりを見回してもそれらしい人影は見えず、ガタリと背後から聞こえた音に振り返れば黒猫が樽の上に居るだけ。

「・・・なんか悔しい」

なんとなく、なんとなく見失ったのが残念なようで、<逃げられた>ように感じるのが悔しい。

まあここに居ても無駄ということで、再び大通りに戻ろうとしたとき、背後で<翼>のはためく音がした

こんな夜中に鳥が？しかし随分と大きな羽音だったと思い振り返ると

「――え？」

片方の目は紅く、片方の目は新緑の・・・<天使>。

天使が実在することにまず驚いたが、それより――<殺気>を感じた。

なぜ天使が？なぜ天使ならば自分に殺気を？疑問ならば沢山あるが、その天使はギシギシと軋んだ音を立てて剣を抜いた。

「冗談で、しょ・・・！！？」

真正面から斬りかかってくる刃を咄嗟に避け、持っていた拳銃を構えて撃つ

しかし大したダメージにはならなかったようで、天使はまたすぐに剣を構えなおす

（何よこれ、なんなの？なんで死なないのよ！？）

恐怖から何発も連続して撃ってみるも、ほとんどは当たる事さえなく無情にも弾切れになった。

ギリりと軋んだ音を立てて再び天使が構えを取り、少女が恐怖にへたり込んだ瞬間のこと――

金属音が響き、天使の剣を白い人物が弾き飛ばした。

その後すぐに肉を裂く音が響き、その人物の<白い外套>を返り血が彩る。

「――」

しん、と静まり返った静寂の中、助けてくれたその人は振り返る

「・・・怪我は？」

白い外套の隙間から覗いたのは<白すぎる肌>に、銀色の髪と紅い瞳。

血のついた剣を払い、青年と少年の境に居るようなその人物は少女に手を差し伸べたが

少女の中では一つ<心当たりのある情報>が引つかかった。

白い肌、闇の国の人間は普通よりずっと<白い肌>をしていると以前、妹だか姉だかが嫌味を込めて言っていた。

「あんたは・・・何？まさか、<闇の国の人間>？」

少女がそう問うた時、少女の顔を確認した青年は紅い瞳を少しばかり丸くする

「・・・おまえは・・・皇国の<皇女>か？」

差し出してくれた手が遠ざかる、あからさまに<助けるべきではなかった>と顔に書いてある

だから手を引つ込めると同時に離れようとするその青年の手を、思

い切り掴んだ。

「ま、待った！待って！」

「なんだ、私の首でも持って帰るつもりか？ならば悪いが死んでもらう」

「ちがつ、違う！」

どこの国の人間だろうと、この人物は今確かに自分をく助けてくられた

皇女だと知っていれば助けてなどくれなかったかもしれない、でも、彼女のよく当たる第六感がく悪人ではないと判断した。

ともかくにも震える足に鞭を打って立ち上がり、その青年と目線を合わせる。

「あたしはあんたの言うとおりレイファリアの十四姫、メルヴィング＝ロートフォードよ。

名乗ったんだからあんたも名乗りなさいよ、お礼はそれからだわ」

「・・・」

しばしメルの子を見つめて何かを確かめていた青年は、しばらくしてフードを取って顔を見せた。

「・・・フェイル＝アースランドだ」

なかなか、いやかなりの美青年である。そしてやはり闇の国の、しかもく王族のようだ。

「・・・助けてくれたことは、ありがとう。でもなんでこんなところに居るのよ？」

「話す義理は無い」

ここでこの青年を殺すなり生け捕りなりなんなりすればメルは大出世だが、そんなものに興味は無い。

まったく興味が無いかと言えば嘘になるが、助けてもらった傍から恩を仇で返すほど性格は曲がっていないはずだ。

「ここ、敵地のど真ん中じゃない？なんでこんなところに居るのか気になるだけよ。それと、恩は返す主義だから」

「見逃してもらえれば充分すぎるく恩返しだ」

そう言って再びフードをかぶって歩き出す青年の背を少女は追いかける。

「・・・」

「・・・」

どうにもこの男は律儀な性格のようだ、だからたぶん・・・。

しばらく後ろを追いかけているとその背が立ち止まり、不機嫌そのものの表情で振り返る。

「殺す気なのか救う気なのか、どっちだ」

「話してくれなきゃ離れない」

なんともく面白そうである。

敵地のだ真ん中に単独で乗り込むなんて、頭がトンでいるかよほど命知らずか、どれにしてもく馬鹿だ。

「・・・本を探している」

「本？タイトルは？見た目は？」

ふと、昨日読んだ本を思い出す、まさかくアレなんてことはないだろう・・・まさか。

「く楽園の崩壊く、白い表紙に金色の文字で書いてあるはずだ」

「うわぁ・・・」

当たった、さすがよく当たる勘だと思わず自分で感心してしまう。

「？。知っているのか？」

「昨日読んだ、く城の図書館くで」

「・・・そうか。貴重な情報をくれたこと、感謝する」

いや待て、く待てその馬鹿く、と思わず言いそうになったのを堪えてその肩を掴む

「ちよつと！まさか城に行く気じゃないでしょうね！？」

「行かなければならない」

「馬鹿じゃないの！？頭トンでんじゃない！？」

結局言ってしまったが、本当にこの人物は馬鹿なのではないか。敵

陣どころか大将の居るところに一人で行こうとは。

「おまえには関係ない、さっさと城に戻れ」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

そのまま去っていつてしまおうとする背をもう一度追いかける、自分がこんなに世話焼きだとは生まれて初めて知った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まだ何かあるのか？」

低いトーンで返って来た声に、メルは息を切らしつつも言う

「あたしが！・・・あたしが取ってきてあげるから！心臓に悪いことしないでよ!!」

「・・・・・・・・？」

このクソ真面目そうな男はどうにもく天然のようだ。

「恩は返す主義だつて言つたでしょ！恩人が自分のテリトリーで死んでるなんて嫌よ!!」

「おまえ、愛国心が無いのか？」

「う・・・いい、いいのよ！あたしは十四姫だもの！別に居ても居なくても変わりやしないわ

それにたかが本一冊無くなろうと誰も気づかないわよ」

「・・・・・・・・」

この青年、フェイルの瞳は不思議だ。無表情のようにも見えるのに、今は敵であるメルを心配してくれているようにも見える
気のせいかもしれないが。

「いーい？西の宿屋で待つて、明日絶対持つてくるから」

青年を横切つて大通りに戻りながら、メルはもう一度振り返つて言う
「絶対待つてなさいよ！」

それ以降は振り返らなかった、勘で彼は待つていてくれると思ったからだ。

——闇の者と恋に落ちて。

あの本のフレーズが脳裏を掠める、何かが始まろうとしているよう

な。

それに、どうも彼は旅をしているようだし・・・

（本を渡す代わりについて行こうかしら）

旅なら色々なところに行くはずだ、少なくともこの退屈生活からは
脱出確実

旅先で＜運命の人＞に出会つかもしれない、なんて。

本当は、この時にはもうなんとなく勘で感じてはいたのだけれど――

翌朝、彼は予感通り待っていた。

そしてメルは本を渡す代わりに、彼についていくことにした、もの
すごく迷惑がられたが。

メルの求める理想の男とは真逆だ、でも・・・

――だって、＜運命の人＞かもしれないじゃない――

自分の運命が本当に最初から決まっているというなら、＜証明して
みせる＞と。

彼女の納得できる形で証明されたなら、運命とやらに付き合っ
てやらなくもない。

だが少しでも納得できなかったらそんな運命など受け入れてやる
ものか。

・・・そう、思っ

て彼女は退屈の日々から抜け出した。

【R】亡ぶ世界に標された道【メル過去編】（後書き）

+++あとがき+++

メルの過去を書きたくていつきに書いたモノ^q^

まだエリユシオンが樂園として崩壊していない頃のお話。

お察しかと思われませんが本にメルを導いたのは断罪神ローレントリンドです。

後のソウルの契約神。

この後もメルとフェイルの長い旅は続くのです、主にメルに引つ張られる形で。

ここまでお付き合いくださりありがとうございました！（、、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8898x/>

ねたばれメモ帳

2011年10月26日01時02分発行